

## 補論 景気ウォッチャー調査の分析

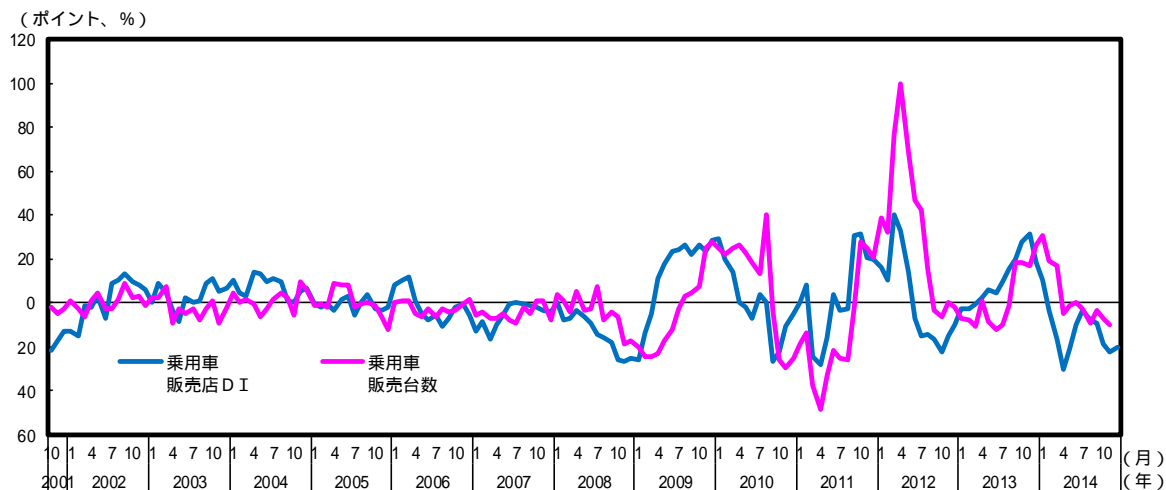
### 1. 景気ウォッチャー調査の業種別のD Iと販売額等の動向について

景気ウォッチャー調査は景況感について2,050名の景気ウォッチャーから毎月月末に報告を受けD Iとして集計している。特に家計動向関連のウォッチャーは販売の現場から毎月の統計データの速報を個々のレベルで報告していることとなり、集計されたウォッチャーD Iは各種統計等の予測値となることが考えられ、両者は一定の相関を持つことが考えられる。

このことを確認するため、業種別の現状判断D Iと各種統計等との相関がどの程度あるかをみる。ここでは現状判断D Iは水準そのものではなく、現状判断D Iの前年差を用い、各種統計等の前年比との相関関係をみる（第3 - 1 (1)(2)(3)図）。

ここでは一つの目安として相関係数がおおむね0.5以上のものをみると、乗用車販売店D I、家電量販店D I、旅行関連D Iが該当することとなった。これらのD Iが一定の相関を示す理由、及び他の業種別D Iの相関が高くない理由については引き続き検証する必要があるが、比較的高額の消費については予測力が高いことがうかがえる。

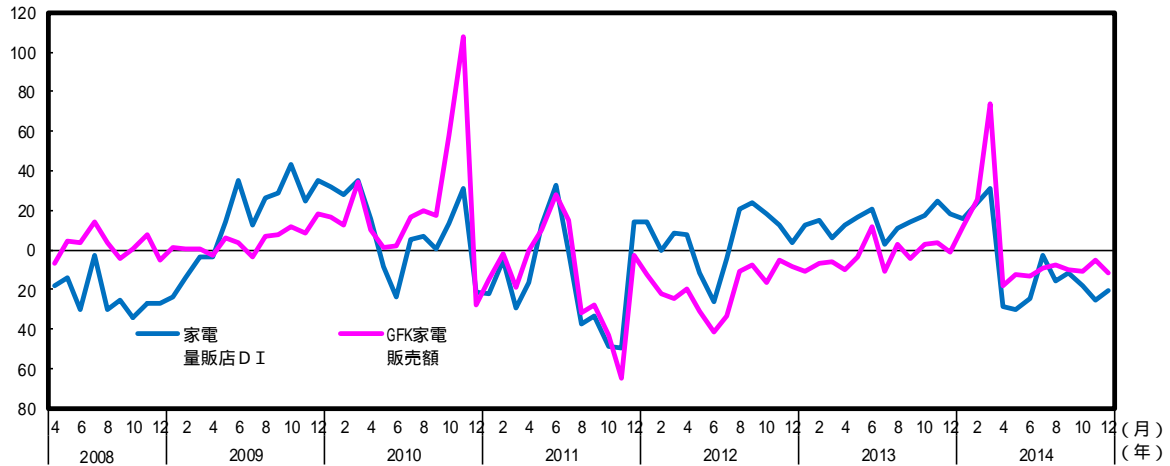
第3 - 1 (1)図 景気ウォッチャー調査 乗用車販売店D I（現状）と乗用車販売台数の推移



- (備考) 1. 内閣府「景気ウォッチャー調査」、(社)日本自動車販売協会連合会「自動車登録統計情報」の登録ナンバーベース、及び(社)全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車日報累計表」により作成。  
2. 原数値の前年同月差及び前年同月比。  
3. 相関を計算した期間は、2001年10月～2014年11月。

第3 - 1 (2) 図 景気ウォッチャー調査 家電量販店D I (現状) と家電販売額の推移

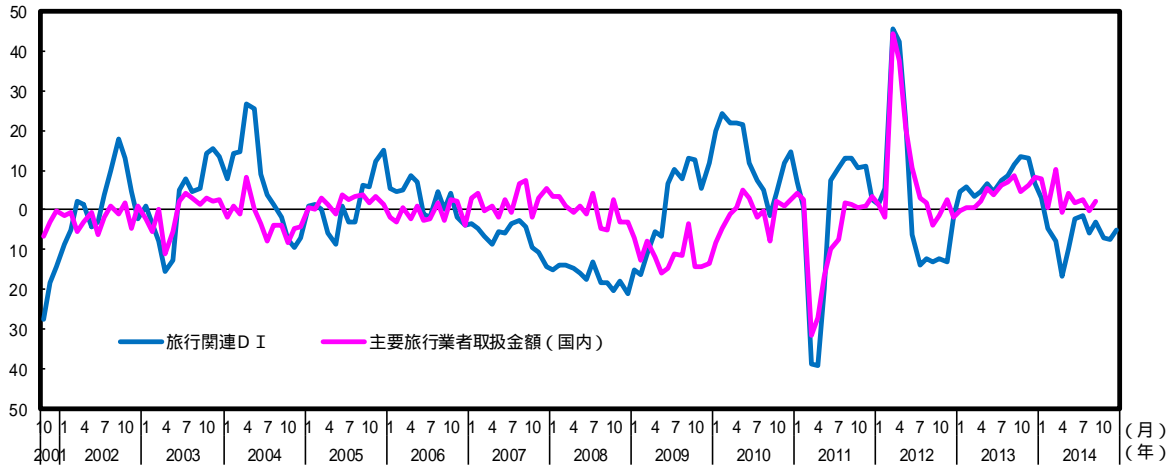
(ポイント、%)



- (備考) 1. 内閣府「景気ウォッチャー調査」、GfKジャパン「家電量販店販売データ」より作成。全17品目。  
 原数値の前年同月差及び前年同月比。  
 2. 相関を計算した期間は、2008年4月～2014年12月。

第3 - 1 (3) 図 景気ウォッチャー調査 旅行関連D I (現状) と主要旅行業者の取扱金額の推移

(ポイント、%)

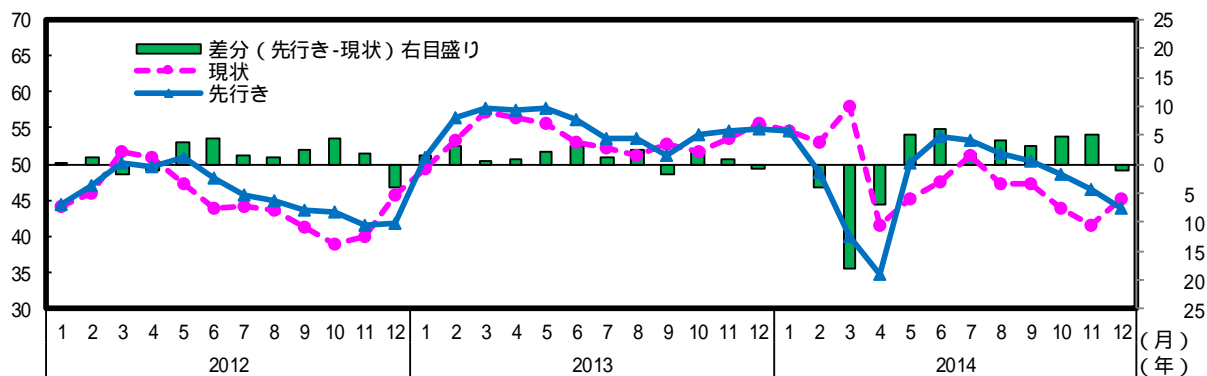


- (備考) 1. 内閣府「景気ウォッチャー調査」、観光庁「主要旅行業者の旅行取扱状況」の国内旅行より作成。  
 原数値の前年同月差及び前年同月比。  
 2. 相関を計算した期間は、2001年10月～2014年9月。

## 2. 景気ウォッチャー調査の先行き判断D Iによる現状判断D Iの予測

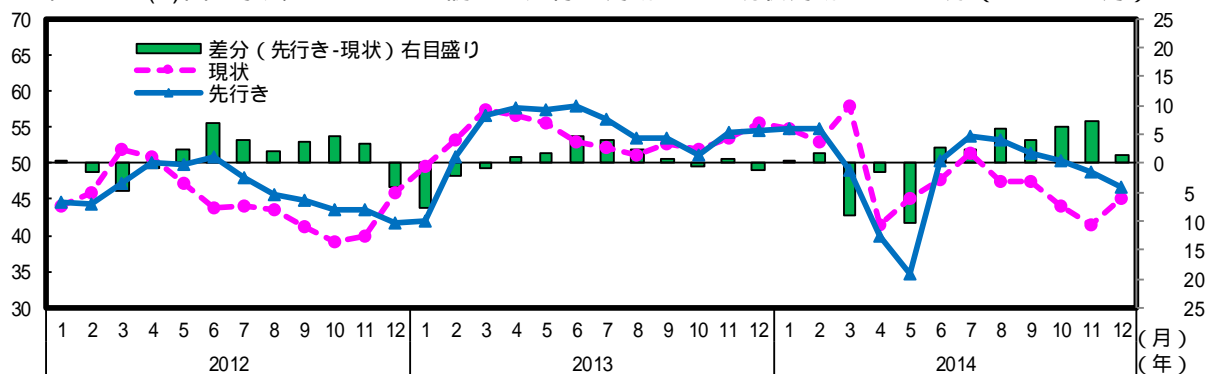
2012年1月以降の期間において、現状判断D Iの動きを、先行き判断D Iの1か月、2か月、3か月のラグを取ったものと比較すると、1、2か月のラグを取った場合の当てはまりがよい(第3-2(1)(2)(3)図)。

第3-2(1)図 景気ウォッチャー調査 先行き判断D Iと現状判断D Iの差分(ラグ1か月)



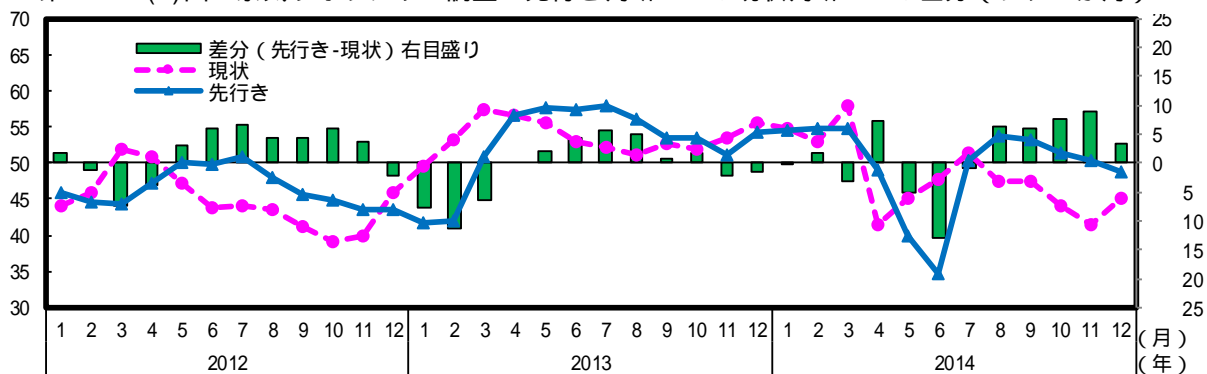
(備考) 内閣府「景気ウォッチャー調査」より作成。先行き判断D Iはラグ1か月。  
現状判断D Iは2012年1月～2014年12月。対して、先行き判断D Iは2011年12月～2014年11月。

第3-2(2)図 景気ウォッチャー調査 先行き判断D Iと現状判断D Iの差分(ラグ2か月)



(備考) 内閣府「景気ウォッチャー調査」より作成。先行き判断D Iはラグ2か月。  
現状判断D Iは2012年1月～2014年12月。対して、先行き判断D Iは2011年11月～2014年10月。

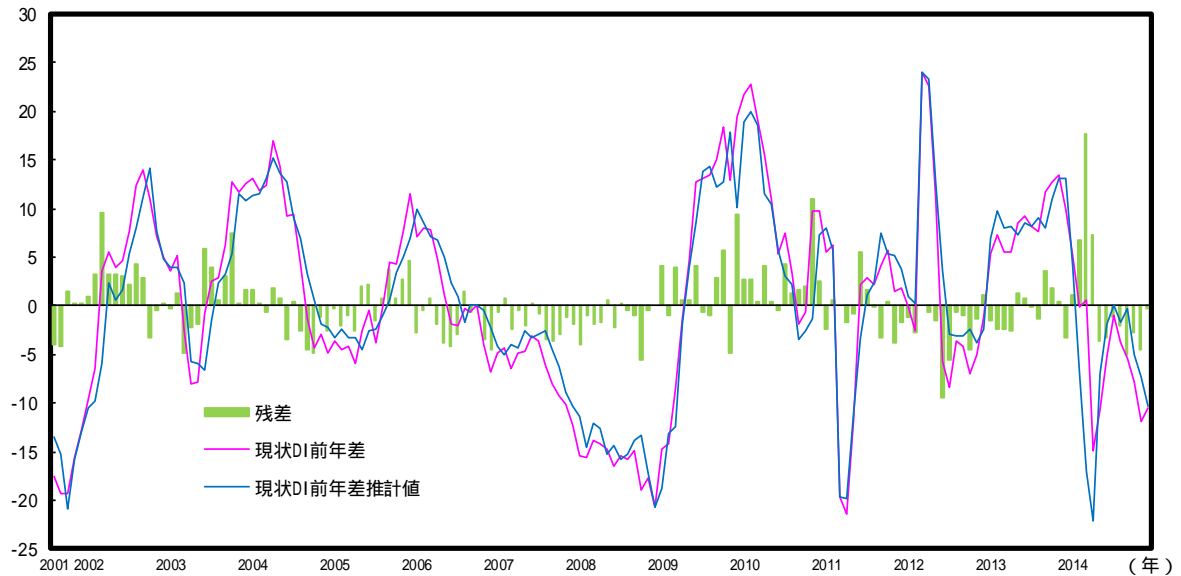
第3-2(3)図 景気ウォッチャー調査 先行き判断D Iと現状判断D Iの差分(ラグ3か月)



(備考) 内閣府「景気ウォッチャー調査」より作成。先行き判断D Iはラグ3か月。  
現状判断D Iは2012年1月～2014年12月。対して、先行き判断D Iは2011年10月～2014年9月。

また、景気ウォッチャー調査開始時からのデータを用いて計量分析により、現状判断DIの動きを先行き判断DIで回帰すると、1か月のラグで最も説明力が高くなり、推計値と実績値はおおむね適合する（第3 - 3図）。

第3 - 3図 現状判断DIの実績値と推計値（-1期ラグ）



（備考）1.内閣府「景気ウォッチャー調査」より作成。

2.現状判断DI前年差推計値

$$= 0.4176 + 0.9890 \times \text{先行き判断DI前年差}(-1\text{期ラグ}) - 7.1718 \times \text{ダミー} - 22.4914 \times \text{ダミー} + 20.8141 \times \text{ダミー}$$

$$(1.51) \quad (33.75) \quad (-2.05) \quad (-6.47) \quad (5.98)$$

ダミー : 2008年12月

ダミー : 2011年3月

ダミー : 2012年3月

( )内はt値

adjusted R<sup>2</sup> = 0.887

D.W.=1.21

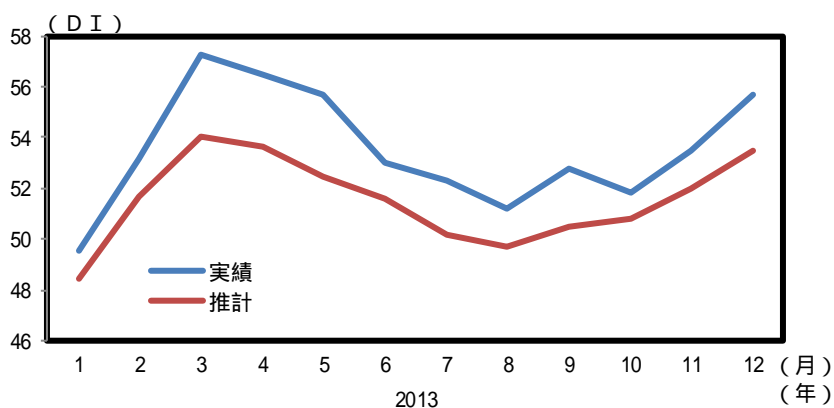
### 3. 景気ウォッチャー調査のコメントからのD Iの再現

景気ウォッチャー調査における景況感の判断理由から、現状判断D Iや先行き判断D Iが再現可能か否かの検証を行った<sup>1</sup>。

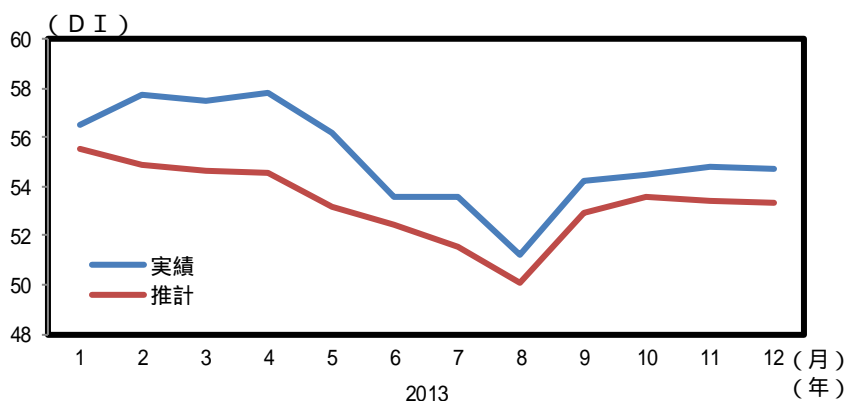
まず、景気ウォッチャー調査のコメントから、言語解析技術により景気動向に関連する特徴的な表現（単語）を抽出・分類し、登場頻度等を数値化しデータベース化した。次に本データベースを用いて、各コメントから景況感に関する5段階評価を機械学習エンジンにより判別（推計）し、集計を行ってD Iを算出した。

機械学習エンジンによる学習期間を東日本大震災を含む期間の2010年～2012年とし、2013年の12か月間の現状判断D Iと先行き判断D Iをコメントから推計すると、推計結果は実際のD Iよりも低い値であるものの、毎月の変化の方向がおおむね整合的であることから、テキスト情報からD Iの大まかな傾向が予測可能であることが確認できた（第3 - 4 (1) (2)図）。

第3 4 (1)図 コメントからの現状判断D Iの推計



第3 4 (2)図 コメントからの先行き判断D Iの推計



（備考）平成25年度内閣府委託調査「東日本大震災後の日本経済の産業構造・景気循環分析報告書」より作成。

<sup>1</sup> 平成25年度内閣府委託調査「東日本大震災後の日本経済の産業構造・景気循環分析報告書」